



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3713 号 2017.6.13 発行

### 重症心身障害児の在宅ケア支援 京都に通所サービス事業所



京都新聞 2017年6月12日

「からふる・ぶらんじゅ」で、職員手作りの台車に乗ってバス遊びを楽しむ慶生ちゃん（向日市上植野町）

重度の身体障害と知的障害が重複する重症心身障害児に特化して通所サービスを提供する乙訓地域初の事業所「からふる・ぶらんじゅ」（からふる）が今年2月、京都府向日市上植野町で開所した。医療の進歩で、人工呼吸器や経管栄養などの医療的ケアを受けて自宅で暮らす重症心身障害児は全国的に増えているが、在宅生活を支える体制は弱い。支援の現場を訪ねた。

#### ■家とは違う体験、喜怒哀楽が上手に

「おはよー」。職員の呼び掛けに、車で約10分の自宅から訪れた杉井慶生ちゃん（2）が笑った。酸素吸入のチューブが喉に、胃へつながる経管栄養の管が鼻についている。体温を計測中、「ゴロゴロ」と音が大きくなる。職員が喉からたんを吸引した。

からふるに週2回通う慶生ちゃんは、産前に心室中隔欠損症と診断された。両親は「胎内死がほとんど。1年後の生存率は10%」と告げられた。手術を重ね、生後8カ月間、新生児集中治療室（NICU）で過ごした。

退院後、訪問リハビリを受け始めると、活動量が増えた。体の反り返りが和らぎ、寝返りもうてるように。リハビリの機会を増やそうと療育の場を探したが、候補は京田辺市や京都市北部の施設。車で長時間の送り迎えが必要で、その最中も頻りにたん吸引しなければならず、断念した。

1年後の今年3月から、からふるへ通い始めた。母親の真衣さん（31）は「家以外の時間を持ち、同年代の子どもと関わりが生まれたら」と期待する。

からふるでは、職員たちが、首が据わりきっていない慶生ちゃんを慎重に抱きかかえ、毛布にくるんで揺らしたり、台車に乗せて動かしたり。刺激への反応を表情や心拍から見定める。慶生ちゃんがチューブを外すこともあり、気は抜けない。1時間かけて栄養剤を注入し、メニューが終わる。

「家とは違う体験がいろいろできる。喜怒哀楽が上手になってきた」と真衣さんは実感する。「通所日は朝から機嫌が良いみたい」

向日が丘支援学校の中学部に通う向日市寺戸町の男児（13）は週2回、放課後2時間を、からふるで過ごす。

仮死状態で生まれ、脳性まひで全介助がいる。2015年11月、突然、気道閉塞（へいそく）が生じた。一時は心配停止状態になり、翌年の1月にたん吸引を容易にするため気管切開した。

医療的ケアの内容が増え、利用していた放課後等デイサービスへの通所をやめた。母親（49）は「医療の度合いが大きくなると、安心して通うハードルが高くなる」と話す。

看護師が常駐するからふるがなければ、放課後は家で過ごすしかなかったという。「家だけでは、できることは限られる。社会への足がかりを積み重ねて成長してほしい」

#### ■専門技術の担い手不足、環境も整わず

「からふる・ぶらんしゅ」代表の神谷真弓さん（50）は「重症心身障害児のケアには専門的な技術が必要で、担い手が足りない。幼稚園や保育園での受け入れは難しいのが現状。自宅の外で発達保障される環境は整っていない」と語る。

厚生労働省は、重症心身障害児について、通所支援の不足から2020年度末までに、未就学児への「児童発達支援」と就学児が通う「放課後等デイサービス」の事業所を、基本的に市町村に1カ所以上確保することを目標にする。

からふるでは、理学療法士や看護師、児童指導員などの職員を置き、児童発達支援と放課後等デイサービスを展開。体を使った遊びや工作、外出を通じ能動的な活動を重視し、リハビリに取り組む。酸素吸入や胃ろうの管理、たん吸引など医療的ケアを行う。利用者は5月末で2～13歳の計11人。

## 発達障害児の親集い30年



長崎新聞 2017年6月12日  
発達障害の子どもの育て方について悩みや不安を語り合う母親たち＝諫早市山川町、西諫早公民館 コミュニケーションが苦手な自閉症スペクトラム障害（ASD）や、気が散りやすい注意欠如多動性障害（ADHD）などの発達障害。そんな障害のある子どもの保護者が、長崎発達支援親の会「のこのこ」（中原圭子会長）を結成して来年で30周年を迎える。保護者が集い、痛みや悩みを分かち合う姿を取材した。

#### ■ストレスを爆発

5月のある朝。西諫早公民館（諫早市）の一室。10人ほどの母親がテーブルを囲んでいた。初参加の母親が、ぼつりぼつりと話した。

「息子は大勢の子がいる教室が苦手。学校から帰るとストレスを爆発させる」

会員は1時間ほど悩みに耳を傾け時折、助言する。「聴覚が過敏かもしれない。検査を受けたら？」「先生への言葉遣いは丁寧にした方がいいよ」

最新の療育法から教師との付き合い方、目が届きにくい障害のないきょうだいへのフォローまで、助言はどれも実践的だ。経験談に冗談を交え、笑い声も起こる。

初参加だった母親は帰り際に言った。「悩んでるのは私だけじゃなかった」

のこのこができたのは1988年。当時の長崎大医療技術短期大学部（現長崎大医学部保健学科）で、療育を受ける子どもの母親10人ほどで結成した。親の会としては九州で初めてだった。

会員は今年、約80人に増えた。30～50代の母親が中心だ。長崎市障害福祉センターや西諫早公民館などに集まり、子どもの年代別に分かれて接し方や悩みを語り合う。父親向けの座談会や、臨床心理士ら専門家を招いた勉強会もある。昨年度は50回以上の会合に、延べ約500人が出席した。

#### ■普通のお母さん

息子に自閉症スペクトラム障害などがある古池美智子さん（48）＝仮名＝は、9年ほど活動している。当初は「『子育てできない母親』と思われていないか心配で、周囲と目を合わせられなかった」と振り返る。

小学1年のとき、運動会で息子は笛の音に驚き行進の列から飛び出した。ラジオ体操も

しなかった。授業中は立ち歩き、友だちをつくるのも下手だった。「今後どうになってしまうのか」。不安ばかり募ったという。

小学校で息子がトラブルを起こすたび、学校から連絡があり、仕事を早退した。やりがいを感じていた仕事も辞めざるを得なくなった。心配してくれる知人もいたが、悩みを打ち明けても分かってはもらえないと思っていた。「他人の言葉に耳をふさぎ、自らの心に閉じこもった」

息子が小学3年のとき、のこのこの勉強会に初めて参加した。子育てのことを話しても、誰からも批判されなかった。

「あ〜あるある」

笑いまで起きる。古池さんは「あそこでだけ普通のお母さんでいられた」と打ち明ける。

ハンディのある子を育てていれば不安は続く。なのに会員はよく笑い、おしゃれもしていた。そんな姿に「明るく生きていく」という強い意志を感じた。

あれから9年。息子は高校に通っている。進路や就職など悩みは尽きない。でも、のこのこの座談会には今も顔を出す。かつての自分のように張り詰めた表情のお母さんが、やって来ることもある。そんなときはいつも、心でささやいているという。「私たちを見て。大丈夫。その苦しみから、いつか抜け出していこう」

同会への問い合わせはホームページ (<http://n-nokonoko.org>)

#### ◎ズーム 発達障害

脳の一部機能の障害が原因とされる。自閉症やアスペルガー症候群、注意欠如多動性障害(ADHD)などが含まれる。自閉症スペクトラム障害(ASD)は自閉症やアスペルガー症候群などを含む新たな呼び方。2012年の国の調査では、通常学級の小中学生(公立)の6・5%に発達障害の可能性があると推計。大人になって診断されるケースもある。



#### 宮城から工場移転「夢食研」 豚タン好評 生産拡大へ

山陰中央新報 2017年6月12日  
定食メニューに加え、好評の豚タン。商談が舞い込み、生産拡大に乗り出す=鳥取県伯耆町大殿、おらほや 東日本大震災で被災して宮城県女川町から鳥取県伯耆町に生産拠点を移した食品製造業の夢食研(本社・女川町)が豚タンの生産を拡大する。県内で豚の内臓が捨てられているのに着目し、牛タン製造ノウハウを生かし、工場隣の食堂で定食メニューに加えたところ好評で、飲食業者から大口の商談が舞い込んだ。現在の月産100キロからトン単位へと大幅に増やし、主力商品・かりんとうと並ぶ2本柱に育てたい考え。年明けにも新工場を稼働させ、雇用を増やす計画で「鳥取に恩返ししたい」と意気込んでいる。

同社は2011年3月の東日本大震災で工場が被災後、伯耆町久古の空き工場を活用してかりんとう製造を始め、13年に同町大殿にパン製造や水産物・食肉加工の工場も開設。1

豚タン商品化は、県内の食肉処理施設で豚の内臓が捨てられているのを知ったのが発端。家庭用に販売するほか、宮城県が発祥とされる牛タンとともに鳥取発の豚タンとして食堂の定食メニューに加えた。独自の酵素を使って臭みと硬さを抑えたのが人気を呼び、それを耳にした関西の居酒屋チェーンから取り引きの打診があった。

計画では、豚タン増産を機に、老朽化した久古工場を閉鎖し、大殿工場の隣に新工場を建てる。かりんとう生産も1日約1千袋から1・5倍に増やす。新工場は今夏に着工予定。

同社工場は障害者自立支援法に基づく就労継続支援事業所で、障害者約40人が利用者として働いており、新工場でも障害者を受け入れる方針。阿部雄悦社長(76)は「鳥取



への恩返しは利用者への工賃で返したい」と話し、豚タン増産が軌道に乗れば、作業工賃を引き上げたい考えだ。

### 障害者アート、思い思いの美 京都で展示



京都新聞 2017年6月12日  
DOの利用者による感性あふれる作品が並ぶ展示会場(京都市上京区・art space co-jin)

京都府城陽市の障害者支援施設「DO(ドゥ)」の利用者が手掛けたアート作品を紹介する「DO art EXPO ドアパク」が、京都市上京区河原町通荒神口上ルのギャラリー「art(アート) space(スペース) ec(エコ) o-j(ージ) in(ン)」で開かれている。

DOでは、創作による表現力の向上や作品展示を通じた地域との交流などを目的に、芸術活動に取り組んでいる。今回は利用者6人の個人作品と、全員による共同作品の計25点を出品した。

共同作品の「face(フェース) to(トゥ) face(フェース)」は、利用者と施設スタッフの顔写真を並べ、各自が思い思いにペイントを施している。かまぼこ板を組み立てて絵を描き近鉄電車を表した立体作品をはじめ、東京タワーやラジカセなどを描いた感性豊かな絵画も来場者を引きつけている。

7月23日まで。無料。月曜定休。

11日～7月23日には、右京区嵯峨天龍寺北造路町のぶらり嵐山内にあるアールブリュッ都ギャラリーでも別作品の展示がある。無料。火曜定休。

### 新見に児童発達支援事業所が開設 遊びや学習の場「もりっこ」



山陽新聞 2017年6月12日  
新見市地域福祉センター内にオープンした児童発達支援事業所「もりっこ」

障害者を支援する社会福祉法人・健康の森学園(新見市哲多町大野)は、児童発達支援事業所「もりっこ」を市地域福祉センター(金谷)内にオープンした。発達段階に応じた遊びや学習の場を提供し、子どもたちの言語や運動、コミュニケーション能力などの発達を支える。

施設はセンター(鉄骨2階延べ約2500平方メートル)2階に開設。センター所有者の市社会福祉協議会から借り受け、一部改修した。広さは約120平方メートルで、プレイエリア、療育室、個別指導エリア、相談室などを備える。スタッフは保育士や指導員計6人。4人が常駐し、2種類の通所サービスを提供する。

児童発達支援は2歳児から未就学児までが対象。平日の午前と午後(水曜午後を除く)に各5人まで受け入れる。放課後等デイサービスは小学1年から18歳までで、水曜午後(定員5人)と第1、3、5土曜の午前(同10人)に対応する。いずれも利用には市が交付する受給者証が必要。

サービスは5月1日から提供しており、5月は延べ25人が利用した。健康の森学園の岡田壽理事長は「保護者の思いに寄り添いながら、さまざまな子どもたちが暮らせる地域づくりに貢献したい」と話している。問い合わせは、もりっこ(0867-72-3053)。

## 保育園と特養 世代超え元気に 新潟秋葉区 一体型施設オープン



新潟日報 2017年6月12日  
特別養護老人ホームのスペースで高齢者と触れ合う園児ら＝新潟市秋葉区

社会福祉法人藤の木原福祉会（新潟市北区）は、秋葉区に保育園と特別養護老人ホームが一体となった施設をオープンした。地域の保育と介護需要に応えながら世代間交流を促すとともに、調理室などの設備を共通化することで効率化を目指した。

一体型施設として整備されたのは「荻川ほのぼの保育園」と「特別養護老人ホーム藤花・荻川」。

当初は保育園が4月1日、特養は5月1日の開設を予定していたが、介護職員の確保が間に合わず、特養のオープンは1カ月ずれ込み今月1日となった。福祉会によると、保育園と特養の一体施設は新潟市内では初めて。

施設は鉄骨2階建てで、述べ床面積は約2800平方メートル。定員は園児60人、高齢者29人で、現在は園児50人と高齢者15人が利用している。

特徴は両施設の間の扉を開ければ、高齢者がテレビを見たり会話を楽しんだりするスペースに園児が来て、交流できる点。6日には保育士の先導で園児たちが訪れてあいさつすると、車いすに乗った高齢者が「何歳になったのかな」などと笑顔で語り掛けた。

今後は入卒園式や敬老会、祭り行事に園児と高齢者が一緒に参加し、交流を深める考え。また、感染症予防のため、両施設に出入りする際の手洗いといった衛生管理を徹底するほか、職員合同で事故と感染症防止のための研修も行う。

福祉会は保育園と特養の調理室を共通化し、メンテナンス業務の委託一本化など効率的な運営もできることから、保育園と特養一体の施設建設を決めた。今後も需要に応じて開設する予定。荻川ほのぼの保育園長の栗原孝樹さん（32）は「子どもたちからすれば、曾祖父や曾祖母の年齢に当たる人たちと交流することになる。核家族化が進んでいる中で貴重な経験。お年寄りにも良い刺激になると思う」と意義を語った。

## <NPOの杜>重症児の生涯を支える

河北新報 2017年6月12日

重症心身障がい児（以下、重症児）とは、話すことができず、歩くこともできない重い障害を抱えている子どもたちのことです。

平成24年に児童福祉法が改正され、放課後デイサービスの事業所が増加しています。しかし、重症児の放課後デイサービスは定員が5名と小規模であることに加え、スタッフに求められる人的要件は専門性が高く、求人を満たすことが難しいため、全国的にみてもまだまだ不足しており、東北地方には数えるほどしかありません。

仙台市泉区で活動する特例認定NPO法人あいの実は、重症児だけではなく、介護に当たる家族も含めた支援に力を入れています。全国的に珍しい入浴サービスを取り入れて、ご家族にも大変喜ばれています。

重症児もいずれは、大人になり、年を取っていきます。その全生涯に向き合っていくことが必要です。「介護は想像力」をモットーに「重症児たちの生涯を支える」活動が全国へ広がるようにと、6月17日には、仙台国際センターを会場にシンポジウムも開催されます。（認定NPO法人杜の伝言板ゆるる 庄司真希）

## 障害者農業 拡大目指す

読売新聞 2017年06月13日

#### ◇高知市社協 メンバー増、2年目

障害者作業所で働く人たちの工賃アップを目指し、高知市社会福祉協議会が始めた有機農業による野菜栽培が2年目に入った。昨年は天候不順などのため収益は少なかったが、今年は主力のピーマン、ナスの苗の植え付け本数を増やし、作業に携わる人も増えて7人に。メンバーは「収量を増やし、将来は地域福祉の拠点に」と夢を膨らませている。

野菜栽培は、知的障害者らが働く就労継続支援B型事業所「きずな」（高知市旭町）が手掛け、昨年は4人がピーマン、ナス、オクラ、枝豆などを栽培。しかし枝豆が猛暑で全滅したほか、準備不足もあり、収穫量は計約240キロ。約20万円の売り上げから苗代などを差し引いた収益は約15万円だった。

指導する職員の吉岡慶浩さん（35）は「炎天下での作業が初めての方が多く、健康管理が大変だった」と振り返る。ティッシュペーパーの袋詰め作業などでは、利用者の障害に合わせて様々な補助具を工夫しているが、野菜の収穫に必要なはさみを安全に使うための補助具が間に合わず、摘み取り作業の多くは職員に頼らざるを得なかった。

しかし、今年は新たな販路も増える予定になったことから、5月19日、ピーマンとナスは昨年の7割増に当たる256本ずつの苗を植えた。「きずな」からは「支援学校時代から畑仕事は好きだった」という女性（20）ら2人が加わり、市社協の生活支援を受ける50歳代男性も「皆と一緒に汗を流すのは楽しい」と頻りに畑を訪れている。

市社協しごとづくり課の徳広祐一課長（きずな所長）は「昨年の経験を生かし、飛躍の年にしたい。今後は畑ももっと広げ、高齢者の皆さんの健康づくりも兼ねた交流の場になれば」と話している。

#### 障害者陸上選手 資金後押し

読売新聞 2017年06月13日

##### ◇愛大 クラウドファンディング

陸上競技で世界を目指す愛媛大教育学部付属特別支援学校（松山市）の卒業生や在校生を支援しようと、愛媛大は、遠征費や用具代などに充てる寄付金をインターネット上で集める「クラウドファンディング」を始めた。7月31日までの予定で、110万円を目標としている。（石見江莉加）

##### ◇特別支援校の遠征費など

知的障害のある生徒らを受け入れている同校が中心となって企画。卒業生で同大学職員の武智湧史さん（19）と大塚才豪さん（18）のほか、在校生らの活動の場を広げるため、資金面で後押しする。

武智さんは1メートル82の長身を生かした大きな走りが持ち味で、昨年男子1500メートルで、日本知的障がい者陸上競技連盟のユース強化指定選手に選ばれた。ペース配分が得意という大塚さんは長距離に力を入れ、今年の愛媛マラソンでは3時間10分台を記録した。

集めた寄付金は選手らの大会遠征費や、ユニホームや靴の購入などに充てられるという。

同校の吉松靖文校長は「選手を育てるためには、全国や世界レベルの大会に出てもらえる環境が必要。地方で陸上を続けるために、支援をお願いしたい」と呼びかける。

武智さんは「大会で頑張っている選手の姿を見たら、大きな声で応援してほしい。寄付をお願いしたい」と話し、大塚さんも「後輩のためにも頑張って練習に臨みたい」と意気込みを語った。

1000円から寄付ができる。同大学ホームページの専用サイト「愛媛大学基金」で受け付ける。

問い合わせは愛媛大基金室（089・927・8110）。

#### バザー収益全額寄付 和木の団体、福祉施設に

読売新聞 2017年06月13日

和木町の「手作りグループ青い鳥」は12日、岩国市の障害者福祉施設「こもれ陽」にチャリティーバザーの収益金を寄付した。



#### 収益金を手渡す牧島代表（右）

同グループは毎年1回、会員らが手作りしたガラス工芸や編み物などを販売し、収益の全額を市内の施設などに寄付している。37回目となる今年のバザーは5月30日に開催され、収益は30万5900円だった。

12日は、会員ら5人が施設を訪問。牧島美智江代表（72）が三島歩施設長に収益金を手渡し、「多くの人に支えられて活動を続けられている。施設の方たちのために役立てて」と語った。

三島施設長は「利用者が施設で楽しく過ごせるように活用させてもらいたい」と話した。

#### 群馬) 発達障害15歳少年 コーヒー豆店開業 上田学 朝日新聞 2017年6月13日



客の求めに応じてコーヒー豆をひく岩野響さん（右）。「ぼくができることから ぼくしかできないことへ」がキャッチコピー。父・開人さんが優しく見守る＝桐生市小曾根町

ぼくにしかできないことを見つけるために——。そんな思いを抱き、15歳の少年が今春、桐生市小曾根町の自宅でコーヒー豆の販売店を開いた。高校へは進学せず、発達障害と向き合いながら、こだわりの味を多くの人に味わってもらいたいと奮闘している。

1日、開店の午前11時前、桐生市内を一望できる水道山中腹の店の前には、既に客が並んでいた。

ガラス張りの店内は明るく、張り替えられた床や、ペンキで塗られた白い壁は温かい手作り感を醸し出している。店主の岩野響（ひびき）さん（15）が、父の開人（はるひと）さん（39）と一緒に自宅の和室を改修した。

響さんは、小学校でのトラブルをきっかけに3年生の時にアスペルガー症候群と診断された。中学生になり、黒板の文字を書き写したり、教科書の文章を読んだりするのが難しくなっていた。登校もつらくなり、1年の夏休みを終えてからは学校への足が次第に遠のき、不登校になった。「今は理解できるが、他の人ができることを自分ではできなかった

#### 横浜市、虐待対応件数 最多6263件 被害児童2737人に支援

産経新聞 2017年6月13日

横浜市は、平成28年度に受理した児童虐待の相談・通告に対する対応件数が前年度比14%増の6263件で、調査を始めた19年度以降最多となったと発表した。また、28年度から支援を開始した被害児童数は2737人だった。

市こども家庭課は件数の増加について「市民や関係機関などの虐待予防意識が高まったことと、家庭の孤立化などによる養育力の低下が複合的に現れた」と分析している。

相談種別の内訳は、「心理的虐待」が2518件で最多。「ネグレクト」（1934件）、「身体的虐待」（1737件）が続いた。

年齢別では、「1～6歳」が2749件で、「0歳」（572件）を含めると過半数を占めた。虐待者は「実母」（3727件）と「実父」（2014件）で全体の約9割となった。

児童相談所では警察からの通告が半数近くを占め、心理的虐待を疑う案件が多いのに対し、区役所では母子手帳の交付や乳幼児検診などを行う福祉保健センターからの通告が2



8・4%と最も多く、ネグレクトの割合が45・6%と最多だった。

今回、区への相談・通告が急増しているが、市は「区が要保護児童対策地域協議会の調整機関であり、通告受理機関としての認識が周知されたことが影響していると考えられる」と分析している。

#### 障害児支援施設が5千万円不正受給、指定取り消しへ 産経新聞 2017年6月12日

和歌山県は12日、障害のある未就学児らが通う和歌山市の障害児通所支援事業所「クロネット」が、常勤の管理責任者を配置しているように偽るなどして、市から約5090万円の給付を不正に受けていたと発表した。県は児童福祉法に基づき、運営元のNPO法人に対する事業者の県知事指定を8月1日付で取り消す。

県障害福祉課によると、クロネットは平成24年4月に事業者の指定を受けたが、申請時に常勤ではない管理責任者を常勤と偽って届け出た。昨年10月に県が実施した定期検査で不正が発覚し、11月の臨時監査でも管理責任者が出勤していると偽った書類を提出した。

同課によると、事業所には今年3月時点で約40人の子供が登録している。不正受給分は近く和歌山市から返還請求するが、刑事告発は検討していないという。

法人の神谷妃佐代理事長は「まだ職員や保護者に説明していないので、現時点で取材には応じられない」と話した。

#### 大阪) 社会への一歩 引きこもり経験者らの店オープン 永井啓吾

朝日新聞 2017年6月13日



初日から近所の人たちでにぎわった「びーの×マルシェ」＝豊中市宝山町

引きこもりを経験した人たちや支援者がスタッフを務める食品・雑貨販売店「びーの×マルシェ」が12日、豊中市宝山町の住宅街の一角にオープンした。社会への一歩を踏み

出す場にしようと、市社会福祉協議会と市小売商業団体連合会が共同で運営する。

市社協は2011年度から、市の委託で、引きこもりの人の昼間の居場所づくりや社会関係づくりをめざす事業「豊中びーのびーの」を実施。これまで約90人が登録し、約30人が就労した。同連合会と協力し、日曜市の出店や買い物困難者の支援をしてきた。

今回、市内の社会福祉法人から事務所を無償で借りて、約40平方メートルの店舗に改装した。場所は阪急岡町駅の西約500メートル。スーパーがなくなり、お年寄りらが買い物に困っているという。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行